

# 8 分割後期・一次 国 語

## 国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは**特別の指示**のあるもののほかは、各問の「ア・イ・ウ・エ」のうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

## 1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 現地に赴いて地質調査を開始する。
- (2) 初めて栽培したミニトマトが実る。
- (3) 気温の上昇に伴って薄着の人が増える。
- (4) アンケートを実施して現状を把握する。
- (5) 市内を循環するバスが桜の並木道を走る。

## 2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 運動後にムギチャで水分を補給する。
- (2) 豊かな自然の中のびのびとくらす。
- (3) 通信衛星がウチュウを周回する。
- (4) 絹糸を使って複雑な模様をオる。
- (5) 学校の中庭に花壇をモウける。

## 3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

高校に入学した愛奈のクラスでレクリエーションとしてバスケットボールが実施された。運動することに消極的な愛奈は見学していたが、縦横無尽に動き、活躍している羽瑠から誘われ、同じチームのメンバーとして試合に参加することになった。

ビブスを着て、コートに立つと足がすくんだ。他の生徒たちが動き回る中、まともなステップさえ踏めない自分がひどく不恰好に思えた。

センターラインまで走ると、バスが飛んできた。胸の前で取ろうとしたが、ボールは想像以上に大きくて重くて、スピンもかかっていたので弾いてしまった。<sup>(1)</sup>足元に跳ねるボールを慌てて擱んで胸元に構え直す。無我夢中だった。

顔を上げると、ディフェンスが前に立っていた。何歩も離れた位置だったし、相手は相当疲れていたが、それでも対峙するプレッシャーは凄かった。羽瑠のようにドリブルで華麗に抜くイメージなど湧かず、手も足もガチガチに固まってパニックを起こしかけた。

ボールを持ったままオロオロしていると、ふと、相手の顔の右横の空間が気になった。

誰もいないスペースなのに、なにか気配を感じる。

迷いの中、そこにふわりとボールを放った。ディフェンスの反応が遅れて、顔の横をするとボールが通過する。

その瞬間、ヒュンと空気が震えると、ボールの先に大きな影が飛び込んできた。

羽瑠だった。長くて締まった手足も、少し屈めた首筋も、全身がしな

やかな筋肉そのものの彼女は、まさに野生動物のように強くて、美しかった。

愛奈が投げたパスとも言えないようなゆるいボールを両手でバシッと掴んだ羽瑠は、その勢いのままドリブルを仕掛けて、ミドルラインで空高く舞い上がり、ジャンプシュートを放った。間近で見た澱みのない動きは、コート外から見ていたよりもさらに滑らかで、芸術品のように美しかった。

弧を描いたボールは、リングに当たることなくネットに吸い込まれ、『スパン』という、なんとも美しい音を鳴らした。自分がゴールを決めたわけでもないのに、雷に打たれたような衝撃が全身を走った。

コートにボールが跳ねる。未だ小さく揺れているネットを見つめていると、羽瑠が駆け寄ってきた。

「ナイスパス！ 凄いじゃん！ 私が飛び込んでるのが見えてたの？」  
熱に浮かされたような思考の中、あのパスのことを言っているのだと気づく。

「分からない。でも、そこに来るような気がしたの。」

しどろもどろに答えると、羽瑠が愛奈の両肩を掴んだ。

「最高だった。もっと頂戴！」

ああそうか、自分でどうにかする必要はない。羽瑠を感じればいいんだ。彼女にボールを渡せばいい。

それが分かると、面白いようにパスが通った。

(2) 愛奈がボールを持つと、羽瑠から光の道が延びる。どの筋を選ぶのかなと考えながら、ボールを放る。はじめは息が合わないことも多かつ

たが、それでも羽瑠は有り余る技術でなんとかしてくる。何度かパスを試みている間に、段々と息が合ってくるのが快感だった。彼女はすばしっこいので、来るのを待ってからパスを出したら遅い。動きの先を読んで、先へ先へとパスを出さなければならない。囲碁で先の展開を予想するようで面白かったが、なにせ考える時間が限られている。半分は予測、半分は直感でパスを出す。躊躇はいらない。羽瑠がそこに来ると信じてボールを投げた方が、彼女にとってはやりやすいのだ。

ディフェンスの背中側、ゴール下のスペースが空いている。そこにボールを投げると、ドンピシャのタイミングで裏から回り込んだ羽瑠がパスを受けて、流れるようなステップでバックシュートを決めた。(3) コンビネーションが決まったことに驚いて羽瑠を見ると、これまで以上に輝いた笑顔が返ってきて、心が熱くなった。

なんでこんな面白いスポーツに触れてこなかったんだろうと後悔してしまうほど楽しかった。

羽瑠の自由で伸びやかなプレーは、窮屈に感じていた世界を力ずくで押し広げてくれる。自分が繋いだパスで羽瑠が躍動してくれるのは、得も言われぬ快感だった。

同時に、羽瑠のメンタルの強さにも圧倒された。彼女は、いくつもある選択肢の中から、あえて難しい道を選ぶことがあった。流石に決めるのは難しいだろうという不利な体勢から放ったシュートでも、強引にゴールにねじ込んだりする。

不利な状況に挑戦し、気持ちの強さで確率を凌駕する光景を目の当たりにして、これまでの自分の生き方に疑問すら抱いた。

私は、確率を重視して挑戦することを避けた結果、自ら世界を狭めてしまったのではないだろうか。

骨身に染み付いた生き方を、いまさら変えるのも難しい。でも、自分だって羽瑠のような無謀な挑戦をしてみたいのだ。(4) いままで感じたことのないような葛藤が、心の中で畝った。

羽瑠がゴール下へとカットインをする。

フリースローラインからその姿を見つめていると、ディフェンスを引きつけた羽瑠が、突然空中でくると反転した。慣性に身を委ねて体が流れる彼女と目が合うと、こちらにボールをポンと投げってきた。

「え?」

胸元でキャッチしたものの、羽瑠がそのままシュートを決めると思っていたので、どうしていいかわからない。戸惑いの視線を羽瑠に送ると、にこりと笑った彼女はゴールを指差した。

「打って!」

見上げたリングは高く聳え立っていて、圧すら感じさせた。ボールを構えてみたが、届くとは思えない。

羽瑠に向かって、すがるような声を出してしまった。

「でも、ど、どうやって?」

「ゴールに入れようと思わないで。全身で真上にボールを放るつもりで投げればいい。できるよ!」

ディフェンスが迫ってきた。ボールを掴む両手は、緊張で感覚すらない。

羽瑠の自信に満ちた声に背中を押されるように、愛奈は無我夢中でボールを放った。悲しいかな、子供が両足跳びと共にボールを空に投げ

るような不恰好なものだった。

はじめて打ったシュートは、ふらふらと不安定な軌道を描いてリングへと向かう。その動きから目が離せなかった。

どうにかゴールに届いたボールは、しかしリングの右縁に当たって真上に跳ねた。

——ダメだ!

そう思うと、胸がキュッと詰まった。

再び落ちてきたボールが、今度はリングの左縁に当たってまた跳ねる。愛奈は願いを込めるようにその行方を見つめて、祈った。

——入れ! 入れ!

すでに手を離れたボールなんだから、いくら願ったって成否に影響など及ばないことなど百も承知だった。

それでも祈らずにはいられなかった。

羽瑠から託されたパスを決めたかった。リングの内側にボールが入れば、自分が閉じこもっていた窮屈な世界に、新たな扉が開くように思えた。(5) たった数秒が、永遠にも感じられた。

バウンドはリングに弾かれるたびに低くなり、その音は間隔が短くなっていく。

やがてオレンジのボールは、力尽きたようにコロリとリングの内側に吸い込まれていった。

ネットを揺らす小さな音が耳に届くと、全身を稲妻に打たれたような衝撃が走った。両手を広げた羽瑠が、嬉しそうに駆け寄ってくる。

自分にも新しい可能性があるかもしれない。初めてのゴールを決めたとき、

そう思った。そう思わせてくれたのが、羽瑠だった。

(藤ノ木優「スウィッチシュー！」による)

〔問1〕<sup>(1)</sup> 足元に跳ねるボールを慌てて掴んで胸元に構え直す。とあるが、

この表現から読み取れる愛奈の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 実際にコートに立つことで、バスケットボールの面白さに気づき始め、少しでも早くドリブルをして相手を抜こうとしている様子。

イ 足元にあったボールを胸元に構えて冷静に周囲の状況を確認することで、相手の隙をつくようなパスを狙おうとしている様子。

ウ デイフェンスが離れているため、今なら簡単に得点することができる  
と考え、シュートの準備をしている様子。

エ 慣れない状況で思いどおりにならないことに焦りながらも、必死にプレーを続けようとしている様子。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 愛奈がボールを持つと、羽瑠から光の道が延びる。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 派手なプレーで愛奈に自分の技術を披露する羽瑠の様子を、慣用語を用いることで躍動的に表現している。

イ 羽瑠がどのように動くかを考えてプレーするようになった愛奈の様子を、たとえを用いることで印象的に表現している。

ウ 成功する確率の高いシュートが選べるように愛奈へパスをする羽瑠の様子を、丁寧に描写することで説明的に表現している。

エ 羽瑠と関わることなく一人でプレーするようになった愛奈の様子を、細部まで描くことで写実的に表現している。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 一番のコンビネーションが決まったことに驚いて羽瑠を見ると、

これまで以上に輝いた笑顔が返ってきて、心が熱くなった。とあるが、このときの愛奈の気持ちとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア これまでにないほど羽瑠と息が合ったことに驚くとともに、羽瑠から喜びに満ちあふれた反応が得られたことで高揚する気持ち。

イ 羽瑠に初めてパスが通ったことに驚くとともに、もっとできるといふ羽瑠の表情を見て、互いのさらなる才能の開花を確信する気持ち。

ウ 自分が羽瑠と同等の技術をもつことに驚くとともに、意図が伝わり喜ぶ羽瑠の笑顔を見て、やっと理解できたことを恥ずかしく思う気持ち。

エ 先の展開を確実に予測できる自分の才能に驚くとともに、羽瑠の笑顔を見るためにもっとパスを追求していこうと決意する気持ち。

〔問4〕<sup>(4)</sup> いままで感じたことのないような葛藤が、心の中で敵<sup>うね</sup>った。とあるが、愛奈がこのように思ったわけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 常に多くの選択肢がある羽瑠にアコがれる一方で、自分のように選択肢を絞る安定した生き方を羽瑠に伝えたいとも考えているから。

イ 挑戦を続けている自分が他人を参考にすることはないと思う一方で、

羽瑠のように堅実な行動を積み重ねて活躍したいとも考えているから。

ウ 自分の生き方に疑問を感じるものの変えることは難しいと思う一方で、羽瑠のように挑戦したいという気持ちもわき上がっているから。

エ 不利な状況を強引さで突破する羽瑠に疑問をもつ一方で、いままさら羽瑠の生き方を変えるのは難しいことだとも感じているから。

〔問5〕<sup>(5)</sup> たった数秒が、永遠にも感じられた。とあるが、この表現から読み取れる愛奈の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 放ったボールがリングに何回も当たっていることに投げやりになり、慣れないバスケットボールを早く終わらせたいと思っている様子。

イ なかなか入らなかつたシュートが決まって羽瑠と共に喜び合うことがあまりに嬉しく、この瞬間を長く味わっていたいと願っている様子。

ウ すでに手を離れたボールの行方はどうすることもできないと諦め、リングに弾かれ続けるボールから視線を外している様子。

エ 羽瑠から託されて打ったシュートが決まれば自分の生き方に変化が訪れるように感じ、思いを込めてボールの行方を見つめている様子。

#### 4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

現代の美学は、「感性の交通の学」として、交通を反省したり、交通を促進したり、交通を生成したりする。ここでいう交通とは、たとえば、時代と時代との交通であったり、文化と文化との交通であったり、分野と分野との交通であったり、人間と人間との交通であったり、作品と作品との交通であったりする。そして、現代の美学は、この目的のために、二つの仕事をおこなう。その一つの仕事とは、伝達の媒体としての用語についての検討であり、なかでもとくに、芸術系の諸分野において鍵となる用語についての検討である。そしてもう一つの仕事とは、伝達の媒体としての形象についての検討であり、なかでもとくに、作品の形象にそなわる伝達の働きについての検討である。この二つの仕事は、学問としての美学がこれまでおこなってきた仕事のなかでも、現代において必要とされる仕事である。（第一段）

学問としての美学は、一八世紀に感性論として成立し、一九世紀にとくに芸術の哲学として発展をとげてきた。<sup>(1)</sup> 今から振り返ると、美学はこれまで芸術について論じてきたようで、じつのところ、芸術について論じるための用語について論じるむきがあった。たとえば、美についての議論は、いふならば、美という語をどう理解したらよいかの議論だったといえる。そのほかにも、「模倣」「表現」「創造」「形式」「様式」「作品」「経験」「理解」「解釈」について議論がなされたが、事実上それらも用語をめぐる議論であったとみることが出来る。たしかに、学問としての美学は、その成り立ちから意識の問題にかかわるものと理解されやすいが、実際において

は、用語の問題にかかわるといふ側面をもってきた。今日この点をもっと自覚してもよいだろう。(第二段)

現代の美学は、「感性の交通の学」として、芸術系の諸分野において鍵となる用語について検討をおこなう。それは、制作や受容のありかたを説明するのに広く使用されている用語であり、制作物のありかたを説明するのに広く使用されている用語である。こうした用語について検討していく手がかりとして、次のことが考えられる。第一に、日常生活において使われる語が、芸術各分野において使われる用語でもあるときに、両者のあいだで意味の食い違いが生じていないかを確認する。たとえば、日常生活でいうモダンの意味合いと、芸術分野における近代の意味合いは、同じとはかぎらない。こうした食い違いを反省してはじめて、日常生活のうちに芸術の知をゆきわたらせることができるだろう。第二に、芸術系の教育機関の名称や、教育分野や教育科目の名称は、時代特有の考えを反映するものであり、各時代において鍵となる用語について知るうえで、重要な手がかりとなる。たとえば、美術の語も、工芸の語も、凶案の語も、構成の語も、造形の語も、名称はその時代の考えをあらわしている。各時代にどんな名称が選択されているかを知るならば、各時代に中心となる用語について知ることになる。あるいは、同一の名称が使われ続けている場合には、同一の名称のもとで教育内容がどう変化しているかを知ること、同一の用語がになう意味の変化をとらえることにもなる。第三に、哲学の成果をよりどころに、用語があらわす物事への深い洞察を得ることができる。哲学の一分野としての美学のほんらいの仕事はまさにこの点にあったといえるだろう。たとえば、形態とは何か、空間とは何か、表現とは何か、といっ

た具合に、自明視されやすい用語ほど、それがいったい何をあらわすのか説明するのは難しい。哲学はそれを説明する役割をになう。(第三段)

用語について検討をおこなう仕事はおよそ次のような広がりをもつ。第一に、時代と時代との交通という観点からすると、各用語の意味がどのように変化してきたかを追うとともに、各時代にどのような用語が好んで使用されたのかを明らかにする。このように、用語の歴史について調べるならば、実際の歴史もそこから透けて見えるにちがいない。たとえば、近代主義において構成の語がいかに前面に出てきたのかを知るならば、近代主義そのものへの理解につながるはずであり、前後の時代との関係も見通しやすくなるはずである。第二に、文化と文化との交通という観点からすると、異なる言語のあいだでの用語の対応関係を明らかにして、そこにあるはずの大小の食い違いに注目したい。たとえば、日本語という構成の語は、コンストラクションの訳語にもなり、コンポジションの訳語にもなり、近代主義の考えを広めるのに都合のよい語だったので、構成の語に注目するならば、日本における近代主義の定着のしかたについて知ることができる。第三に、分野と分野との交通という観点からすると、分野と分野をまたがって流通している用語をとりたてて検討したい。たとえば、構成の語への注目によって、絵画から音楽におよぶ感性について論じたり、建築から組版＊くみはんにおよぶ感性について論じたりできるだろう。第四に、人間と人間との交通という観点からすると、以上のような用語の検討によって、当事者どうしの相互理解がうながされるだろう。<sup>2)</sup>一番のねらいはここにある。(第四段)

学問としての美学はもともと感覚について論じる分野として成立した

ので、対象について論じるときには、あくまで、対象の現れについて論じるといふ立場をとる。そのかぎり、美学にとって形象すなわちイメージはつとめて論じられるべきものである。形象とは、平面において作られた現れであるか、空間において作られたものの現れである。形象はまた、そのかぎり、形式をそなえた現れであり、秩序をそなえた現れである。したがって、形象について論じるときには、形象自体がそのうちに一種の交通をはらんでいることが前提とされてきた。すなわち、形象のうちなる交通とは、生き生きとした形式にみとめられる、部分と部分との相互作用であり、部分と部分との相互関係であり、そのなかで、意味の受け渡しがおこなわれ、意味が生み出されていると考えられてきた。(第五段)

現代の美学は、「感性の交通の学」として、形象がいかなる交通をはらんでいるかを明らかにすることで、形象がいかなる交通をおこなうかを明らかにする。すなわち、形象がいかなる関係をはらんでいるかを明らかにすることで、形象がいかなる伝達をおこなうかを明らかにする。そうしたとき、芸術における伝達は、作品の形象とおした伝達であるかぎり、たしかに、情報通信のような伝達とは異なる。したがって、芸術について説明するときには伝達の働きを持ち出すのがよいのが問われるだろう。しかしむしろ、特殊な伝達のありかたについて考えるほうが、伝達についての理解を深めていくのに有意義にちがいない。そこでまず問われるのは、芸術において伝達の主体はいったい誰なのかということである。それはかならずしも芸術家とはかぎらない。芸術において伝達の主体はきわめて曖昧であり、二つのどれでもあるような状態にある。すなわち、

第一の主体は、芸術家であり、第二の主体は、芸術家をうながした社会であり、第三の主体は、作品の形象それ自体である。なかでも、作品の形象がたんに伝達の媒体であるだけでなく、伝達の主体でもあるというのは、すなわち、芸術家にたいして作品が自立した存在であるということであり、作品の形象のうちに生きて語りかけるような人格がみとめられるということである。次に問われるのは、作品をおして伝達されるものは何かということである。<sup>(3)</sup> 形象の内容もしくは形象の意味として読み取られるものは、けっして芸術家の意図した内容とはかぎらない。絵画の形象にしても、文学の形象にしても、建築の形象にしても、芸術家の意図した内容をただ伝えるものではない。むしろ、作り手の意図した内容よりも、作り手の無意識のほうが、伝達内容として重要であるにちがいない。その理由は、作り手の無意識のほうが、背後の社会とより密接に通じており、そのかぎり、重要な真理にかかわると考えられるからである。現代の美学は、さらにまた、作品とみなされない形象についても深読みを進めようとする。たとえば、製品の形象からでも、番組の形象からでも、広告の形象からでも、部分と部分との相互関係のなかから送り手の無意識をつきとめて、送り手の意図を超えた意味をさぐろうとする。(第六段)

(高安啓介「近代デザインの美学」による)

〔注〕 組版くみはん——文字や図などをページに配置する作業のこと。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 今から振り返ると、美学はこれまで芸術について論じてきたように、じつのところ、芸術について論じるための用語について論じるむきがあった。とあるが、「芸術について論じるための用語について論じる」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 芸術系の諸分野において、特に重要な用語として反省、促進、生成という言葉を取り上げてよいかを検討するということ。

イ 芸術系の諸分野において、美を美学として成り立たせるための用語をどのように現代に伝達するかを検討するということ。

ウ 芸術系の諸分野において、感性を伝達するための媒体となる用語をどのように理解したらよいかを検討するということ。

エ 芸術系の諸分野において、感性論から芸術の哲学まで扱われていた用語を学問としてよいかを検討するということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 「一番のねらいはここにある。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 歴史の用語の翻訳に着目することで、近代主義と前後の時代を理解させることが人と人との伝達における最大の目的だということ。

イ 用語の意味や使い方を多方面から検討することで、当人同士の理解を進展させることが人と人との伝達における最大の目的だということ。

ウ 近代の用語を作り直すことで、作者と鑑賞者との議論において意見の統一を図ることが人と人との伝達における最大の目的だということ。

エ 用語を調べ文化の対応関係を明確にすることで、互いに特定の考えを定着させることが人と人との伝達における最大の目的だということ。

〔問3〕 この文章の構成における第五段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた内容に続けて、次の論の前提を提示することで、文章の後半で述べる内容へと展開を図ろうとしている。

イ それまでに述べてきた内容に基づいて、補足となる他の事例を重ねて述べることで、論に説得力をもたせようとしている。

ウ それまでに述べてきた内容について、対照的な主張を提示することで、それまでの話題の方向性を否定しようとしている。

エ それまでに述べてきた内容をまとめることで、文章全体の意味を深めるとともに、論点の整理を図ろうとしている。

〔問4〕<sup>(3)</sup> 形象の内容もしくは形象の意味として読み取られるものは、けつして芸術家の意図した内容とはかぎらない。とあるが、このように

筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 作品が人格として形象を伝達することで、まるで生きているように感じられるようになるから。

イ 形象の意味を作り手の意図として深読みし伝達していく主体は、芸術家を鑑賞する人々であるから。

ウ 芸術家の意識と社会の意識が反映されることで、形象の内容は芸術家と作品との密接さを弱めているから。

エ 形象のうちなる交通によって生み出される意味には、作り手が伝えたことと関わりなく背後にある社会も影響すると考えているから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「送り手の意図を超えた意味を考える」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

5

次のAは、平安時代末期の歌人西行さいぎょうに関する対談の一部であり、Bは、「新古今和歌集」と西行のつながりについて書かれた文章である。また、あとの□の中のa、dは、それぞれBに含まれている和歌及び古文の現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A 目崎めさき 西行のシンポジウムがあつて、聴きに行ったんですね。そこに

た和歌の研究者は、大抵、西行を買わないんです。

白洲しらす そういう集まりですと、どうしても藤原定家ふじわらのていかあたりが中心になるんでしょねえ。

目崎 定家は大歌人で、西行はどうしても「素人しろうと」だということになる。

白洲 たしかに素人なんですよね、定家からみれば。でも、西行は天才だったと思います。あの歌の美しさは比類がないですね。

目崎 西行は『新古今集』では筆頭歌人ですよ。ただし、西行が『新古今』を代表しているか、というところではない。

白洲 『新古今』の中では、ひとりだけ違うところにいるという感じ。平気で俗語なんか使っていますね。

目崎 わかりやすいですね、西行の歌は。そういうところが、私には大変面白かったですね。

(1) 白洲 いつもそういう二つの流れは、どんな世界にもあったでしょうね。ものによってはちょっとわからない歌もありますけど、総体的にいうと、非常にわかりやすいし、難しい勉強をしなくても入っていける。わたくしのような「素人」でもすんなりと入ることができますから。

目崎 実は私も西行がいいなと思ったのはそういうところなんです。白洲 いえ、先生は専門の研究者でいらっしやるから。

目崎 いや、全部が全部わかりやすいわけでもないんですが、注釈を読まなくても、西行の歌にはわかりやすいものが多いですよ。定家のように本歌取りをやっていたりすると、古今集やら何やらいろいろ調べなくてはならないんですが、西行の場合はそういうことがないから、まず煩わしくない。そういう歌もいいんじゃないかと思うんですよ。

白洲さんは『西行』という立派なご本もお出しになって、よくご存じですが、我々にとって西行の魅力というのは、やはり漂泊ひょうぱくだと思いますか、しよつちゆう旅\*かわたじゆんをしているという印象があることだと思いますね。ところが、川田順\*かわたじゆんさんが言っていることなんです、実際にはあまり歩いてない、と。東北へ二度行っていることは有名ですが。

白洲 でも、二度行っているようなことを言っている説もありますね。例えば、十七、八のときに、白河の関に行っているとか。

目崎 それは全然気がつかなかったですね。

白洲 それから、木曾路も歩いておりましょう？ 吉野から先の大

峯山みねざんのあたりも少くとも二度行っておりますし、当時の人からすれば、相当な旅行をしているんじゃないでしょうか。

目崎 もちろん、当時の人からみると大変な旅人だと思いますね。

ただ、ご存じの西行伝説がありますが、そこでいわれるほど\*一所不住ではなかったと思います。

(2) ただし、我々のあこがれとしては、生涯、旅をしていたというイメージがないと、魅力がない。

白洲 ただ、やはり西行の精神としてはそうだったんじゃないですか。

どこかに縛られるということがなかったから。

目崎 精神的な意味で申しますと、一種の自由人で、まさに旅人です。

それと行動の実態は分けて考えませんとね。

白洲 行動の範囲はそんなに広くなかったのかしら。

目崎 もっとも、みちのくといえ、今でいう南極か北極みたいなところですから。そこに若いときに行きましたし、二度目の東北旅行は六十九歳で行っているわけですから。

白洲 当時としては大変な高齢でございますよね。

目崎 ええ。また、四国に行ったとか。ただ、九州に行ったのはわからないんです。それと、四国に行ったときと別に、厳島神社

に行っているんですね。他にいろいろなところにも。年がら年中、どこかに動いていたんですね。

結局、社会的ないろいろな拘束の中でがんじがらめになっ

いというか、そういう人生を自分で選び取っていることが、まあ言ってみれば、旅人でしょうね。

(目崎徳衛・白洲正子「西行と芭蕉」による)

B 西行の和歌は、最初詞花和歌集に一首「読人知らず」として入集した。

撰者は藤原顕輔である。

\* 世をすつる人はまことにすつるかは すてぬ人こそすつるなりけれ

というこの難解な歌が、公的に認められた最初の作品だった。ついで、藤原俊成を撰者とし、後白河院の命による千載和歌集に十八首の入集を見た。西行が世に認められるについては、俊成の好意と見識によるところが大きい。

ア おしなべて花の盛さかりいなりいにけり 山の端はごといにかかる白雲

ウ 嘆なげけとて月やは物を思おもはする かこちがほなるわが泪なみだかな

エ 来こむ世には心のうちに現あらはさむ あかいでやみぬる月の光を

というような作である。

そして新古今和歌集である。この集は、後鳥羽院親撰という性格の濃厚な勅撰集だが、もちろん通具みちとこ・有家ありいえ・定家いえたか・家隆まさつね・雅経まさつねなどの撰者が和歌所に奉仕して撰定にあたっている。これらの人びとの評価のうえに、後鳥羽院の見識が加わっているのはいうまでもない。西行和歌の入集は、実に九十四首の最高歌数である。すでに西行死後のことだった。

歌学書・後鳥羽院御口伝で、院はつぎのように述べている。

d 西行はおもしろくして、しかも心も殊に深く、ありがたくいできがたきかたも共にあひかねて見ゆ。<sup>(3)</sup>生得の歌人とおぼゆ。おぼろけの人のまねびなどすべき歌にあらず、不可説言語の上手なり。

俊成・西行を併称した院は、特に西行を「生得の歌人」として認めた。院の鑑識をうけて後世の芭蕉は、「かりそめにいひちらされしあだなるたはぶれことも、あはれなるところ多し」(許六離別詞)と評価した。「心も殊に深」い歌風こそ西行のものとする院の評価は的を射ており、しかも、それが院の求めてよしとする歌風だ、といっているのである。西行を最初に認めたといっているのは俊成だろうが、俊成をも含め、西行を最高の地位において認めたのは、ほかならぬ後鳥羽院であったのである。これは、院の鑑識が、何より真情のこもった作風の価値を至上としたからにはかならない。和歌の抒情詩としての本質を、絢爛たる新古今の技巧時代にも見失うことがなかったのである。

(山本幸一「西行の世界」による)

a この世はどこも一様に花の盛りになったよ。どの山の端にも白雲がかかっている。

b 歎けといつて月がもの思いをさせるのだろうか、いやそうではない、つれない恋人ゆえである。それなのに月のせいにして、かこつけがましくこぼれ落ちるわが涙であるよ。

c 来世には心の中に現わそう。この世でいくら見ても見飽きなかった月の光を。

(「新 日本古典文学大系」による)

d 西行の歌は内容に面白味があつて、しかも格別に深い真情がこめられていて、たやすく考えつきにくい趣向も、共に備わっているとされる。この西行こそはまことに生まれながらの歌よみと思われる。生半可な歌人などがその真似などをすべき歌ではない。彼こそまさに言語に絶する名人と言えよう。

(久保田淳「後鳥羽院御口伝」による)

〔注〕

本歌取り——古歌の一部を引用して新しい歌を作る修辞法。

川田順——歌人。

一所不住——僧などが各地を行脚して、一か所に定住しないこと。

詞花和歌集——平安時代末期に成立した、六代目の勅撰和歌集。

世をすつる人はまことにすつるかは すべてぬ人こそすつるなりけれ

——出家して俗世間を捨てた人は、本当に捨てたといえるだろうか。俗世間にとどまり成功を求めている人こそが、本当に

大切な自分自身を捨てているのだ。

千載和歌集——七代目の勅撰和歌集。

併称——一緒に並べてほめること。

「かりそめにいひちらされしあだなるたはぶれことも、あはれなるところ多し」

——たまたま口に出して言い散らしたい加減な戯れ歌であつても、しみじみと心打たれるところが多いものだ。

許六離別詞——松尾芭蕉が門人の森川許六に送った餞別の言葉。

抒情詩——叙情詩と同じ。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 白洲さんの発言のこの対談における役割を説明したものと

最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 直前の目崎さんの発言を受けて、西行の和歌をよいと考える理由を付け加えて話題を深めようとしている。

イ 直前の目崎さんの発言を受けて、自分が考える西行の和歌の難しさを強調して話題を焦点化しようとしている。

ウ 直前の目崎さんの発言を受けて、西行の生き方に関する自分の考えを示して問題の所在を明らかにしようとしている。

エ 直前の目崎さんの発言を受けて、西行が新古今和歌集を代表する歌人であるという自分の考えについて共通理解を図ろうとしている。

〔問2〕<sup>(2)</sup> ただし、我々のあこがれとしては、生涯、旅をしていたというイメージがないと、魅力がない。とあるが、「生涯、旅をしていたというイメージがないと、魅力がない。」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 人生を通じて東北から九州まで縦断する一度きりの旅をした人だったという印象がなければ、西行の魅力が失われるということ。

イ 高齢になるまで極地への旅を控えていたという印象がなければ、西行の魅力が失われるということ。

ウ 若い時に旅をして年を取って落ち着いたという印象がなければ、西行の魅力が失われるということ。

エ 一生を通して自由人であり旅人であったという印象がなければ、西行の魅力が失われるということ。

〔問3〕 Bの中の——を付けたア、エのうち、現代仮名遣いで書いた場

合と異なる書き表し方を含んでいるものを二つ選び、記号で答えよ。

〔問4〕<sup>(3)</sup> 生得の歌人とあるが、dの現代語訳において「生得の歌人」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア たやすく考えつきにくい趣向

イ 生まれながらの歌よみ

ウ 生半可な歌人

エ 真似<sup>まね</sup>などをすべき歌

〔問5〕 A及びBで述べられた、西行の和歌の特徴についてそれぞれ説明したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア Aでは新古今和歌集の他の歌人とは異なっておりわかりやすく表現された和歌が多いと述べられ、Bでは和歌の本質を理解する後鳥羽院から真情のこもった作風だと絶賛されたと述べられている。

イ Aでは定家の和歌以上に新古今和歌集を代表する和歌が多いと述べられ、Bでは技巧的で新古今和歌集らしい作風だと俊成から認められたと述べられている。

ウ Aでは素人らしいわかりやすさが大多数の研究者に評価された和歌であると述べられ、Bでは絢爛な作風が何よりも魅力的な和歌だと述べられている。

エ Aでは専門的に研究しないと理解できないような和歌であると述べられ、Bでは定家の解説によって、ようやく世に認められた和歌だと述べられている。